

事例研究報告

小学部低学年の児童（肢体不自由）の 安全な食事指導のあり方を考える

児童の実態

1 現在の食形態(1学期)

- ・米飯は普通
- ・副食は粗刻み大
- ・牛乳はストロー飲み

2 食事の様子(家庭)

- ・1cm角程度にカットした普通食を食べている。
- ・噛むことが好きではなく、噛み続けているとだんだん嫌になってくる。
- ・食べさせるペースが速いのか、たまに吐くことがある。

3 学校給食の様子

- ・刻み食なので噛む必要もなく、毎日ほぼ全量摂取できている。
- ・たまに、普通食のやわらかい煮物を噛む練習をしているが、口の動きはよい。

保護者の願い

- ・本人のペースでゆっくりと成長してほしい。

教員の願い

- ・落ち着いて給食に臨んでほしい。
- ・普通食にした場合、固いものも丸呑みせずしっかり噛んでほしい。

アドバイザーからの助言

第1回コンサルテーション
9月29日(木)

【献立】 鶏肉のみそ炒め・シューマイ

- ・口腔の発達には問題がない。
- ・反対咬合があるので、歯科の指導が必要。
- ・からだと頭の位置はよい。視覚刺激に左右されているので、パーティションが必要かもしれない。
- ・ペーシングのペースや咀嚼もよい。
- ・口腔残渣もないので嚥下の状態もよい。
- ・一口量には注意が必要だが、普通食でよいと思われる。
- ・家庭で吐きそうになることがあるのは、ペースが速すぎるのかもしれない。
- ・食事はコミュニケーションの場でもあるので、食材を二つ並べて「どっちがいる？」と聞く等、意思表示の場を作ることが必要。
- ・手づかみ食べの練習が必要。

助言を受けての見直し

1 食形態の変更

コンサルテーション後、保護者の了解を得て、粗刻み食から普通食に変更した。

ごはん・牛乳・クリームシチュー・ブロッコリーサラダ



粗刻み大



普通食

助言を受けての見直し

2 食形態の調整

- ・こんにゃくや干し椎茸等は5mm角程度に刻んだ。
- ・煮物のにんじん, 大根, 厚揚げ等はそのままの形で提供。
- ・炒め物の野菜や豚肉等は1cm程度に刻む。

3 手づかみ食べの練習

4 選択の機会の導入

指導の経過

1 給食時間の様子(12月現在)

- ・こんにやく、干し椎茸等は、丸呑みしてしまうことを心配し、5mm角程度に刻んだ。
- ・炒め物の野菜や豚肉等はやや固いので、1cm角程度に刻んだ。
- ・特にむせることもなく、毎日ほぼ全量摂取できている。
- ・豚肉がやや大きいと、ほぼ噛めているのに飲み込まず口から出してくることもあった。
- ・口角は左右非対称に動いている。外から見ても、食材をよく噛んでいる様子が伺えた。
- ・コッペパンや唐揚げをスティック状に切り、前歯で噛み切る練習も行ったが、なめるだけで噛み切ることができなかった。

2 手づかみ食べの練習

- ・自立活動の時間等に、スナック菓子やチョコレート等の手づかみ食べの練習を行った。
- ・本児には、手で持ってものを食べるという意識が少なく、教師が手を添えて口に入れようとしても、口を閉ざして食べようとしなかった。
- ・食べたい気持ちよりも、目の前にあるものを手でさわってぐちゃぐちゃにしたい気持ちの方が強い。

指導の経過

3 コミュニケーションの場としての食事

- ・スプーン2つにご飯とおかずをのせて提示し、「どっち食べる？」と聞いたり、ご飯とおかずのお皿を見せて「どっち食べる？」と聴いたりすることを、意識的に取り入れた。
- ・手で引き寄せることはなく、食べたい方に視線で注目し、意思を示すことが多かった。
- ・見つめていても口に入れてくれないとわかると、口の方を近づけて食べようとした。
- ・本児は、嬉しくなりすぎるとからだをバタバタさせてテンションが上がりすぎる傾向にあり、「どっち食べる？」と聞くと、ハイテンションになってしまうこともあった。

アドバイザーからの助言

第2回コンサルテーション
12月22日(木)

【献立】 かぼちゃのうま煮・ならあえ

- ・前回より咀嚼の回数が増えており、咀嚼については問題がない。
- ・自立活動の時間に手づかみ食べの練習をしているとのことだが、食事として認識できていないかもしれないので、食事の場面で、自分から手を伸ばして食べてくれたらいいなぐらいの気持ちで提供しておいて、介助食べと並行して行うとよい。
- ・教師の介助は、正面からではなく横からがよい。
- ・食材を小さく刻みすぎると、口の中でばらけてしまうので、一口大ぐらいのカットでよい。
- ・前歯で噛み切れるようになることが大切。

質問 発語に繋がるような支援の方法について

- ・単語の理解を増やしていくことが重要。
- ・本児の発音を教師が模倣してみせる。
- ・発達段階に応じた働きかけをする。

指導の成果

1 児童の変容

- ・えびフライなどあまり噛みたくないものは、噛まずに出してこることもあったが、はさみを1回入れるくらいの支援で、ほぼ毎日の給食を全量摂取することができた。
- ・手づかみ食べに関しては、給食時に一口分皿に入れて机上に置いておくと、手を伸ばしてさわろうとするので、それを口に運ぶように練習をしている。
- ・前歯で噛み切ることは、唐揚げやパンはあまり噛み切ろうとしないが、棒状に米飯を握ると、前歯で噛み切る動作が見られ始めた。

指導の成果

2 教職員の変容

・安全面を重視するあまり、保護者の希望する食形態で食べることにあまり疑問を感じていなかったが、専門家のアドバイスを受け、自信をもって保護者にも食形態のアップを勧めることができた。

・コンサルテーションを受けることにより、教職員間で共通理解を図り、児童の実態について深く検討することができた。

さいごに

・毎日の生活に追われ、安全第一と思って給食指導を行っていたが、適切な食形態、食材の大きさ、一口の量、適切なペース、食事時の姿勢等について、改めて記録を取ったり、専門家のアドバイスを伺うことで、こちらから保護者にいろいろな提案をすることができた。食形態をアップしたことで、口の動きもよくなり、発声のバリエーションも増えた。

・今後も、対象児童のみでなく、様々な実態の児童に対応できるような給食指導のあり方を共有していきたいと思う。